

第

520.4-Ki57-4ウ



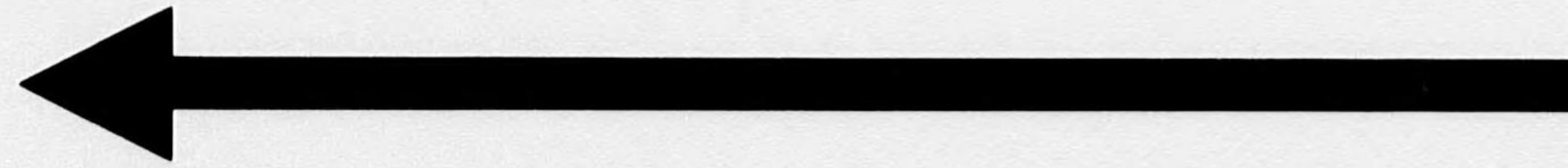
\*1200501905171\*

5204  
57  
+

叢書  
六すまひの傳統



始





日本叢書六



すまひの傳統

岸田日出刀

生活社刊



520.4  
KI.57  
41



すまひの傳統

(カッタ中西利雄)



われわれを生き育ててくれた日本  
この日本のよいところをもつとよく  
知り、良くないところはお互ひに反  
省し、すぐれたものの數々をしつか  
りと身につけ、どんなときにもゆる  
がずひるまず、正しく強く伸びて行  
く、もとなり力となる、そんな本  
をつくりたい。



# すまひの傳統

岸田日出刀



## すまひの和洋

わたくしはいま、幅一間長三間の縁側に文机を出して、それと對つてゐる。左様の硝子障子には、晝前の陽が暖く一面照つてゐる。松籬頼りで、外はかなり強い風らしいが、この縁側にあると、何十年來だといふこの寒さも、さほどにも感じない。陽光のありがたさである。けふは立春だといふのに、この縁側に置いた鉢の蘭の葉は霜にあたつたやうに打ち萎れてしまひ、床の活花の水盤の水も雨天と

葉牡丹の莖ごとに、底まで凍りついてしまつてゐる。この冬はほんとに寒かつた。だが紀元節も近いのだから、もうたいしたことはあるまい。

この縁側となる十一疊の書齋も、陽當りはよいのだが椅子に腰かけて卓子に對ふと足が冷えるので、縁側を日光室代りに、座蒲團を敷き机に向つてゐるのだ。カーテン越しに眼をやると、庭の芝生のところどころには、おととひ降つた雪がまだとけずに、浅く陽に映えてゐる。蒲縁前の沓脱石の上にのせた鉢の萬年青は、寒さに強いものとみえ、その厚ぼつたい葉で寒風をはねかへしてゐる。

書齋には壁付燗爐があり、そこで薪を赤々と焚けば、暖かくものも書けさうであるが、B二十九が東京の都心近くを白晝盲爆してから一週間あまりの、けふこの頃のさしせまつた情勢の下では、そのやうなことは思ひもよらない。人爲的の燗房法が不如意の場合には、陽光こそ頼みの綱である。「日照」といふことの重要さを、火の氣のない何十年來の寒さのこの冬ほど痛切に感じたことはない。

縁側と書齋との間の仕切りは、襖に似かよつた開き扉で通じてゐるが、その上の小壁には、ブルーノ・タウトからわたくし宛の手紙を横額にしたものが掲げてある。それは唐紙の巻紙に毛筆で書かれたしやれたものだつたので、記念にと表装して額にしたものである。それは次のやうに置かれ、文字のほどよい位置に、ローレライと中山七里の水墨即興畫が描かれてゐる。

## 二

「親愛なる岸田君、葡萄山と汽船と獨特の雰圍氣をもつローレライは遠いが、しかもここもまた美しい。葡萄酒の代りに酒があり、ラインの代りに日本ラインがある。中山七里、ここも美しいラインです。たとへその美はほんものの五分の一から十分の一程度であらうとも。今日は高山泊り、明日は白河に發ちます。われわれは今熱心な日本内地見學漫遊の途上にあり、更に多くの興味の満喫を望んでゐます。」日附けは、三十五年五月十六日とあるから、もう今年から十年あまりの前のものだ。

ここでわたくしは、タウトがその日本滞在中住んでゐた高崎市外少林山の、ささやかな寓居を想ひ出す。それは純然たる和風の住まひだつた。直接そこを訪れたことはなかつたので、その和風の家の内部に於ける彼の生活ぶりは知らないが、おそらくある部分は和式であり、他の部分は洋式のものではなかつたかと思ふ。日本流の住まひのよさを充分よく知つてゐたタウトも、本來生粋のドイツ人であつたのだから、すくなくも彼の仕事部屋すなはち書齋だけは椅子卓子式のものであつたらう。

小泉八雲が松江で住んだ家も、ありきたりの和風住宅であつた。タウトや八雲のやうな特殊の外國人でなくとも、日本にすこしながく住まふ外國人は、誰でもしらすしらすのうちに、和風住宅といふものよさを知り、それが好きになるものらしい。

かれこれ七・八年前のことで、家を建てることも今とちがつて、何につけ自由の頃だつたが、フランス出の夫人をもつ友人K氏から、その住まひの新築設計を依頼されたことがある。場所は東京の青山で、敷地はさう廣くはないが建物の延坪は百六十坪あまりの二階建(一部三階建)で、普通の標準からいへば、かなり大きな規模の家である。出来上つた家の様子は、その夫人と共著の「UNE MAISON JAPONAISE D'AUJOURD'HUI」(今日の日本住宅)と題して、上梓刊行して發表した。それは住宅のひとつの建築作品として、或は傑出したものでも何でもないかもしれぬが、「住まひの和洋」といふやうなことに對する、わたくしの平素の考へを一應まとめて具體化したものとして、すくなくもわたくし自身としては、意義深く思ふ作品のひとつである。

この書物の巻頭に、G夫人の「私の家に就いて」の一文を載せたが、長く日本に住む西洋人の「日本に於ける住まひ」に關する考へなり、また「住まひの和洋」といふ課題に對するひとつの觀方なりが、よく判つて興味があると思ふので、その一部分をここに抄録してみよう。

「東京のやうに、東西ふたつの相異つた文明が併立してゐるところでは、住宅の建築はなかなか複雑した問題となります。わたくしはヨーロッパ人として、本來ならヨーロッパ



特にフランス風の家を選ぶのが自然のやうに思はれませうが、事實に於いてはさうではありません。極く少数の例外を除いては、日本の洋風住宅といふものは、どちらかといへば外観だけのものを、備へてゐないのではないかと思はれてゐるところのものを、備へてゐないのではないかと思はれます。歐米では、大きな都市でもまた海濱や温泉場などでも、家はみな相當に大きな窓をもつ厚い壁で、外界とはつきり區劃されてゐるのを常とします。

日本では、よほど立派な住宅は別として、大部分のものは壁も薄く、従つて壁で寒暑を防ぐといふことはむづかしいことで、かりに本格的な洋風住宅をつくることになりましても、それは濕氣のためにたいへん困ることになります。でわたくしは、いろいろの點で不備な洋風住宅にこだはることは、決して得策ではないと思ふのです。すくなくとも東京では、その風土上の特質、例へば強い雨、それもある時節に見まはれる風を交へた横なぐりの雨には、つくづく難澁いたします。驟雨の後などに壁に大きなしみがつきて、それが塵や埃のために醜いまだらとなつて残つた跡をよく見受けたりします。その上半は熱帶的ともいふべき強い雨は、庇——長い經驗から日本の建築の特徴となつてゐる——なしでは到底防ぐことはできません。長い間東京の生活を和風住宅でしてきて、そのよき所に大きく縁先の開いてゐることは、何ものにも代へがたくよいと思ふのです。だんだん氣候がよくなつてくるにつれ、縁先を思

ひ切り開け放つたあの氣分は、また格別なものであります。でわたくしは、このことだけは自分の家の缺いてはならぬ要件といたしました。しかしよく閉め切つた家でのみ感ずる親しさや、また冬よく部屋を暖めるといふことから、戸風のものを取捨けることが是非とも必要となりませう。しかし普通の洋風住宅では、わたくしの氣に入るだけの大きな開口をもたせることは、事實上不可能なこととなり、そんな大きな開口をつくるのは技術上からむづかしく、また経費もかさむことになりませう。

でわたくしは、雨戸を使ふことに決めました。さうすると、純洋風の外観をもつ家は、不調和なものとなりますので、これまでいろいろ相談してゐた岸田教授がしきりにおすすめになつた關西風の堅板羽目張りの壁にすることにしました。和風住宅といふものは、その美しい線と優美さを以て、この國では最もよく周囲と調和するものとして、わたくしは平素からそれをこの上なく愛してゐます。火災の危険といふことを除いて、よくわたくしどもの生活にも適してゐますから、部屋の中のいろいろこまかなところにも、同じ理由からできるだけ多く日本のものをとり入れるやうにいたしました。

### 三

住まひの和洋といふのも、それは生活そのものの和洋から来る形式のちがひである。建築の分野でも、和洋の折衷

などいふことが、かなり前のことだがやましく論議されたことがある。だがさうした和洋折衷論には、今日から考へればあまりピットリしない議論が多かつたやうである。建築に和洋といふ二つの嚴然と區別される形式があることを考へることから、それらをどう按配すれば、和洋を合體してうまい調和がもたらされるかといふ點に、さうした和洋折衷論がやましくなされた根據があるのだが、よく考へてみれば、家の造り方すなはち住居に應用される建築技術といふものは、日本のものも歐米のものも、決してさう根本的にちがつたものではないのに氣がつく。家である以上、土臺があり、軸組があり、壁があり、窓があり、そして上に屋蓋を載せるといふ構築形式は、日本も歐米もすこしもちがはない。外形上の差異は、家の建てられる土地の地の風土氣候や、その中で營まれる人の生活形式がちがふことから、當然結果されたものであるにすぎない。

われわれ日本人の生活内容も、詮議立てすれば、これは洋的要素であれば和的要素と、數へ上げることでもできようが、洋風文物の移入からもう一世紀近くも経つてゐる今日では、そんな詮議立ては無用であるほどに、今日のわれわれの生活は、古い堅い意味での和でもなく、また洋でもなく、今日の要求に即した独自の形式にまとめ上げられてゐると考へてよからう。だから家をつくるといふ場合にも、頭からさうした和だの洋だのといふ型を考へるのは誤つたことであつて、「和式で家を造る」とか、「洋式で家を造る」

とかいふ先入感を、まつ捨て去るべきである。さうでなければ、今日のわれわれの生活に即した活きた住まひはできないであらう。大切なことは、今日のわれわれの生活そのものを正視し見きはめて、それにピットリとよく適應する住まひを、和洋といふやうな固陋な形式感を超越した建築技術を以て、わが國の風土氣候によく合致するやうに、端的に造り上げることである。

かうして出来る住まひといふものは、固陋な形式感から豫想されるいはゆる和式のものでもなければ、また洋式のものでも決してないであらう。そしてここに和式なり洋式といはれるところのものは、單に家の外形についてだけのことではなく、更に廣くその間取りなり、構造なり、材料なり、設備なりを意味すべきことはいふまでもない。

日本の住まひの歴史は長い。そしてそれは數々の傑れた傳統をもつてゐる。と同時にそれはまた多くの因襲なり缺點をも併せもつものであることを卒直に認むべきである。すなはち、日本の住まひの檢討といふことが、是非とも必要であつて、よい傳統や長所はあくまでもこれを活かし、わるい因襲や短所は勇敢にこれを殺すやうにしなければならぬ。それならば、古來の日本の住まひには、どんなよい傳統と長所があるか、またどんなわるい因襲と短所があるか。これらをことこまかに檢討して、わが國の住まひのありやうを詳しく述べることは、この小冊子ではよく盡せないが、以下項を分けてわが國の「住まひの傳統」を



集つてみよう。

# 間取り

建築は藝術だといはれるが、藝術は藝術でも、建築は他の繪畫や彫刻のやうな藝術とは全くちがふ部類の藝術である。建築に似た藝術といへば、まづ工藝であらう。建築も工藝も、それらはあくまで用に即した藝術であることが、その特徴である。建築のもつこの實用性といふものを、正しくはつきりと知れば、建築でいちばん大切なものは、その平面計畫すなはち間取りだといふことが判らう。建築の立面（外觀）も断面（室内空間）も平面から生れるとされるのは、建築が用に即したものである以上、當然すぎるほど當然なことである。

この平面すなはち間取りといふものは、官衙・事務所・學校・病院等の公共建築でも、すべて大切なものではあるが、間取りのよさわるさが、使用上の不便に直接影響するものは、特に住家に於いてであり、更に規模の小さな家でもこのことは更に痛切である。今日住宅營團により續々と造

らわつてある住宅は、その一家族の住まふ家の面積が十坪以下といふ小さなものであるが、かうした極度に切りつめた廣さの住まひでは、何よりもその間取りのよしあしが、住まふ家の不便を根本的に規制してしまふものである。だから住宅營團でも、その平面計畫をあらゆる角度から検討し研究して、誰がみてもこれ以上のものは考へられぬといふ最善の案を樹て、いくつかの標準型間取りをつくつてそれによつて大量の狭いながらも便利で快適な住宅を迅速に建設しつゝある。

家の間取りは、家の規模が小さければ小さいほど、むづかしいものである。大きな家ならば、すこし位の無駄も、かへつて趣きがあるなどとして大目にみられもするが、十坪以下といふやうな小さな家では、一尺四方の場所も無駄にはできぬ。家は住むための機械だといふコルビュゼの警語は、一時新しい住宅建築の合言葉ともなつたが、事實小さな家では、技師が機械を設計するときのやうな態度で、建築家もその家の設計に當らなければならぬであらう。

この「家の間取り」といふ點で、在來の日本の家は、多くのすぐれた長所をばもつてゐる。扉をあければきつと壁で仕切られた箱のやうな部屋に入るといふ洋風の「間取り」に對して、障子や襖をすゝつと引けば二つの部屋も一つとなり、小さな部屋も大きく使へるといふのが、和風住宅の「間取り」の方針である。専門的には、この和風住宅にみる

平面形式を「通り抜け式」といひ、洋風のそれを「廊下式」と呼ぶ。學校や病院やホテル等の公共建築にみるやうに、長い廊下に沿つて澤山の部屋が並んでとられ、それらの部屋には廊下に面する扉を開けて入る。部屋の獨立性が強く求められるやうなさうした公共建築の場合には、この廊下式平面のよきことはいふまでもないが、住宅といふ私的な建築では、この廊下式平面形がよいとは一概にはいへない。あまり大きくない家では、日本流の通抜け式平面の方が、遙かに便利なきことが多い。

西洋で一般によくとされる平面計畫も、わが國ではよくないといふのも、西洋人の生活形式とわれわれ日本人の生活形式とがちがひ、またその風土氣候がちがふからである。西洋の家では、プライバシー（秘密性または非開放性の意）といふことがやかましくいはれるが、それは彼等西洋人の生活が個人本位で、親は親の部屋、子は子の部屋、親でも夫の部屋と妻の部屋、子でも息子の部屋と娘の部屋といつた具合に、家族構成人員がそれぞれ獨立した生活を要求して、自分だけの部屋を個々に占有するといふのが、その建前となつてゐるからである。だがわれわれ日本人の家での生活は、決してそんな個人本位のものではない。家族全體が集つて、そこにひとつのまとまつた家が構成されるのであるから、これは誰の部屋あれは誰の部屋といふやうに、他人行儀に嚴重に區劃する必要はないわけである。繰り返していへば、西洋の家は個人主義的な部屋劃であり、日

本の家は家族主義的な部屋劃ともされよう。

## 二

西洋の家の個立的な部屋劃は、またその風土氣候や壁を構成する材料の關係もあることが注意される。すなはち、西洋の家では専ら冬に對する考慮や設計が必要で、このためには部屋を壁で嚴重に區切つて外氣を遮り、また部屋を暖めるといふことが大切である。また西洋の家は、古くからその壁は石や煉瓦で積み上げられる構造であつたから、あまり大きな開口部がその構造上からできにくいといふ事情もあつた。

これに對し、日本の住まひは、兼好法師が徒然草ですでに古く道破したやうに、「家の造りやうは夏をむねとすべし」であつて、「冬はいかなる所にも住まる」といふわけにも行くまいが、とにかく「あつき頃わろき住居はたへがたきこと」である。家の構造も從來は木造だつたが、この木造家屋では窓や出入口は如何やうにも大きくとれるわけでも、かうした風土や生活や材料等の諸要素が、互に因となり果となり經をなし緯をなして、みるからに開放的な日本の家がでできたのだ。極端な場合には、部屋と部屋との間を仕切る建具を撤去すると、一家が一室にさへなつてしまふやうな例もある。田舎でよく見かける田の字形の部屋劃をもつ家では、夏に部屋界の襖なり障子をを外すと、四つの部屋は一つの大きな部屋となつてしまふ。かうした家の



夏は、みるからに廣々として涼し氣である。そこに長い傳統をもつわが國農家の間取りを見ることが出来る。

暑い夏も、部屋を廣くすることによつて涼しく暮せるものである。寺の本堂が夏涼しいといふのも、周囲の環境が涼しげであることにもよるが、またその本堂が部屋として天井も高く廣々としてゐるからである。だが冬はその逆であつて、大きな部屋はみるからに寒々と感ぜられる。

小さな家ほど廊下式平面は面積の上で損であるから、十坪以下といふやうな小住宅が通抜け式平面であるのは當然である。かうした小さな家では、部屋の獨立性などといふことは、およそ意味をなさぬ。しかし坪數はどんなに少くとも、ひとつの家族が住まふ家である以上、部屋の數はすくなくも二つは要る。すなはち夫婦の寝る部屋とその他の家族の寝る部屋の二つで、これら二つなり三つの部屋が、書間は居間となり茶の間となり更に客間ともなつて、自在に部屋の融通性が發揮されるところに、日本流間取りの大きな長所がある。

西洋諸國でも、近頃の新しい住宅では、日本流の平面組織が應用され出したのは、興味ある事實である。そして家が小さいときに、特にさうした傾向がみられる。一九二七年にドイツのフランクフルト・アム・マイン市で、最少限の生活のための住居「展覽會が催され、ヨーロッパ各國の著名な多數の建築家が、その最善とする案を樹て、それを實際に建てて、新しい住居の發展に寄與しようとしたこと

があるが、それら諸案に共通してみられた特徴は、從來の洋式住宅で特に指摘できたところの部屋の獨立性といふことが、かなり大膽に揚棄されてゐたことだ。居間と食堂との間の仕切りもあつさりとかーテンや折疊式の扉で區劃するといふやうな案が多かつた。家が小さくなると、どうしてもかやうな部屋の融通性といふことが必要となつてくる。

### 三

和風住宅にみる通抜け式平面といふものは、長い歴史をもついはば古いものだが、またよく考へればそれはいつまでも新しい生命をもつ活き活きとした平面計畫であることに氣づくであらう。通抜け式平面とはいつでも、家には縁側や廊下らしい通路もさしはとられるから、それらをうまく配すれば、必ずしも部屋を通抜けなければならぬといふ不便もなくなり、廊下式平面の長所を適宜にうまく按配することもできるものだ。

間取りと關聯して想ひ起されるものに、家相といふ怪物がある。天の方位を子丑寅卯以下十二に分けて、家の形や間取りの如何によつては、この天の方位がその家に住まふ家族の禍福を左右するといふのである。何の據りどころもない非科學的な迷信に過ぎず荒唐無稽なものではあるが、巷間では想像以上に信用もされてゐて、侮りがたい潛勢力をばもつてゐる。

方位、すなはち家や部屋の向きといふことは、日照や採光等をすくなく支配するものであるから、建築學上重要な問題であるが、家相説にいふ天の方位と住者の禍福との關係が、さうした日照・通風・採光等との關係に於いて言はれるのならばとにかく、かやうな科學的根據を全く欠くところの家相説なるものは、單なる迷信にすぎない。方位はたしかに建築學の問題ではあるが、家相が當るか當らぬかといふやうなことは決して建築學の問題ではありえない。恰も狸は動物學の對象ではあるが、狸が化けるかどうか動物學の問題ではないやうなものである。

家相といふものがいつ頃からわが國に流布されたかはあまりはつきりしないが、おそらく平安朝の頃支那から傳つたものではあるまいか。

家相では東北の方向を鬼門として忌み嫌ひ、この鬼門の方向に便所や湯殿などの不淨のものを配すると家難が起るとは、家相の幼稚園的知識で誰でも知つてゐる通りである。家相の書を見ると、あれもいけないこれもいけないといつた調子で、家など怖くて建てられなくなつてしまふだらう。都市でもその東北方を鬼門として、京都では比叡山延曆寺に相輪櫓を立てて都城の鎮護とし、また江戸ではやはりその東北方に當る上野に寛永寺を建てて、その鎮護としたといふ事實もある。

東北を忌むのは、家相起原の地と考へられる支那の長安や洛陽あたりでは、すこしは意味があつたかもしれない。

すなはちこれらの地方は、東北の方から冬の凄まじく寒い朔風が吹いてくるから、この方を鬼の棲む方位として嫌つたのも、なるほどと首肯もされようが、わが國では東北を特に忌み嫌ふさうした理由根據はすこしもない。京畿に較べて東北地方は、文化の發展がすこしはおくれたといふやうな點は、かりにあつたにしても、それだからといって東北を鬼の棲む地か何かのやうに、忌み怖れるいはれはすこしもない。

かなり前のことだが、知人からその家の設計を頼まれたとき、その夫人が家相の信者であつたとみえ、ここあすここのいろいろうづかしい注文を出されて弱つたことがある。かうした場合、家相は信するに足らぬ迷信ですから意味がありません」と説得しようとしても、その信者には家相は絶対なものだから、これを反駁して白紙に還らせようとしても、徒勞に終ることが多い。方角博士のお言葉であれば致しかたありませんね」と、妥協ではないが一應その方角博士の主張なり忠言を聴いて、できるだけそれと正面衝突しないやうにする以外に道がない。家相説に従つても家の間取りといふものは、考へれば考へるほどいい智恵が出てきて、うまく解決できるものである。方角博士の忠言に惱まされたことは一再ならずあるが、わたくしはいつてもさうした方角博士の忠言と建築家としてのわたくしの案とがうまく兩立するやうに努めてゐる。

わたくしの今の小さな住まひを建てるとき、その工事を



やつた棟梁が大の家相信者で、庭の一隅縁先にちよつとした池をつくらうとしたら、そんなことをすると家に病人が絶えませんが、およしなさいと真剣になつていふので、逆らつては家の出来にもさはると思ひ、とうとう造らなかつたが、空襲頻りの今日この頃、あのとき池を掘つておけばよかつたのにと残念至極である。

大學で住宅の平面計畫の講義の折、學生に向つて、「諸君は今若いから、家相などはてんで信じようともしないだらう。だがあと三四十年も経つて、老人となつた諸君のうちから頑固な家相信者が出ないとは保證できないね」といふと、學生たちはきまつて「アハハ」と笑ふ。

## 疊

日本の家と歐米の家とを較べてみる。いろいろの點でちがふが、日本の家ではその部屋に疊が一面に敷かれてゐるに反し、歐米の家では床は板敷としてその上に椅子卓子等の家具を配する點が、その最も根本的なちがひである。すなはちわが國の家は坐式生活のためのものであり、歐米の

家は腰掛式生活のためのものである。わが國でも、極く古い時代には、部屋一面に疊を敷くといふことは行はれなかつた。上代から飛鳥奈良時代はいふまでもなく、平安朝の古式を傳へる京都御所で紫宸殿の儀禮的な建物を別として、天皇常の御座所とされた清涼殿を拜しても、その部屋部屋の床は一面の板敷きとなつてゐる。ただ御座のところがだけに、今の座蒲團のやうな具合に、「置き疊」が敷かれたにすぎない。藤原時代に大成した寝殿造の部屋も、床は板敷きとして、坐るところだけに置き疊を配したものであることは、當時の公家の屋内生活のさまを描いた古い繪巻物からでもよく窺へる。床はかく板敷きであつたが、椅子卓子の類は用ひてゐない。

わが國の家で、部屋を疊敷きとする法は、まづ鎌倉時代になつてからのことで、その起原は概ね床や書院のそれと相通じてゐる。鎌倉時代に武家の住居建築は、一般に「武家造」なる形式で知られるものであるが、敷地内は中央の主要な建物をなした主殿では、部屋は全面的に疊敷きとされてゐた。かやうに疊の歴史は、おおよそ六百年とみてよからう。

では、その家の造りやうも著しくちがふものでなければならぬことはいふまでもないが、すくなくもその主な部屋だめには疊が敷かれるといふのが、一般の現状である。長く内南洋に住んだ人が、「一日仕事をして家に歸り、青疊の上に浴衣がけでゴロリと横になるのは、ホントにいいものです。所は内地とどんなに離れようとも、家に疊だけは欲しいものです」と述懐するのを聞いて、わたくしは外地に永く住んだ経験はもたぬが、なるほどさうだらうなとつくづく思つた。

日本人の住むところ、そこには必ず疊がある。それほど疊といふものは、われわれ日本人の生活になくてはならぬものなのである。またそれだけ疊といふものはいいものなのだ。

疊を敷けば、建具も洋風の開扉式のものでは似つかはしくないから、紙張障子に襖をといふことになり、更にまた主な部屋には床や棚や書院を整へ、床には軸をかけ花を活け、棚には日本的な器物を飾り、静かで落ちついた日本らしい情趣を味ひたくもなるであらう。この日本人の生活になくてはならぬものとなつてゐる疊についても、多くの議論があつたし、また今もさかんになされつゝある。疊論議とはどんなものか。要約すれば、(イ)疊は固陋である、(ロ)疊はいい傳統である、活かせ。といふ相反する二つの主張となるが、また(ハ)廢めようと思つても活きつつけるだらう、といふ傍觀説も成立たぬわけではない。

疊は衛生的でなく、また進歩的なものでもないといふはれる。某大家の著書の中で、寢室は洋風として寢臺を配するがよい。寢臺は寢心地もよく、衛生上もよろしい。疊の上におかに夜具を敷いて寝るのはよくない。疊には塵埃がたまりやすく、蒲團の上の枕の高さは、鼻孔が疊の上〇〇握となり、塵埃を吸ふにちやうど手頃の高さとなつていない。寢臺ならこのやうな心配がない。といふやうな一項を讀んだことがある。だがわたくしは、寢臺に寝るのは病院だけで結構だと思ふし、寢心地にしても寢臺は落ちつかないで好かない。こんなことをいふと、建築家らしくない非文化人だと笑はれるかもしれないが。

また他の論者は、疊の上に坐つたり胡坐をかけたたり、横になつたりするのは、おおよそ活動的な居住形式ではない。立居振舞の敏捷にできる腰掛式、すなはち床は板敷きとして、その上に椅子卓子を配する洋風に越すことはない。アジアの天地に、更に大きく世界に雄飛しようといふ日本人が、北や南でいつまでも疊に戀々としてゐるのは、おおよそ退嬰固陋ではないか。陋習すべからず改むべしといふやうな論をなす。これらの論、みなそれぞれもつともと背ける節がないでもない。

三年ほど前に、わたくしは小さな家を建てた。それはのんきな僧家住まひがいやになつたからといふのではなく、



いつまでも住むつもりで借りて来た家の家主から立退きを強要され、立退くのがいやならこれの値段で買へとの談判に、買ふくらるなら建築家の手前いやでも建てねばならぬ筈、住むに家なくのつびきならぬ羽目となつて、くやしきまぎれに無理をして建てた家である。家のありやうなど常人に説法もしてきた建築を天職とするわたくしであつてみれば、その建てる家は平素の主張を具現した理想のものでなければならぬ道理である。大東亞戦争直前で、資材も極度に窮屈であつたし、また何よりも資金が充分でなかつたからと逃げ口上を並べるわけではないが、出来上つたものは平素のわたくしの理想から遙かに遠いものとなつてしまつた。この家をみた知人が「建築家が自分の家として設計したのだから、モダンな家かと思つたら和風ですね」と、なんだつまらぬといはぬばかりの挨拶だつた。日本人でありながら日本の家のホントのよさを知らぬやうな者に日本建築のよさをいくら説明しても何にもならぬと思ひ、「こつやの白袴ですか」と對手にしなかつた。わたくしは夏の暑さにはあまり辟易しない。流汗淋漓の酷暑の方が寒くてちぢこまる冬よりは仕事の能率も上つて好きなのだが、壁のところどころにポツリポツリと小さな窓をあけた箱の中にとぢ込められたやうな洋風の部屋での夏の生活は考へただけでもいきがつまりさうである。

住宅は公共建築とはちがふ。能率萬能・合理徹底の事務用建築などは、その建築としての本質を著しく異にして

る。住宅は最も私的な建築であり、一日働き抜いて疲れた身心をゆつくりと寛ろぎ休ませる場所である。青畳の上にゴロリと横になり、胡坐をかくことによつて、身心を休めることができるといふのが、われわれの長い生活傳統からきた習性であるとするならば、疊廢止の合理主義的論旨には、遠かに贅意を表しかねる。

武士道精神とか日本の精神といふやうなものも、疊の部屋を離れては考へられないやうにさへ思ふ。武家興隆の鎌倉時代に、疊が部屋一面に敷かれるやうになつたといふ歴史的事實をも併せ考へてみたい。羽織袴で端然と威儀を整へ正坐することによつて、始めてそこに日本的武士道精神がよく涵養されるものとも考へられよう。椅子卓子が如何に便利だからといつて、われわれ日本人の生活が疊と全然離れてしまつたら、日本の心といふものがだんだんなくなつてしまふやうな氣もする。椅子に腰かけ、寢臺に寝る生活に徹底する歐米人に、日本のほんとの武士道とか精神といふやうなもの眞髓を、果してよく認識把握することができぬであらうか。このとき日本の軍隊生活を擧げてそれを反駁するのは當らない。軍隊は住まふ家の中とはまるでちがふのだから。日本人である限り、その住まふ家の中からは疊を根こそぎ驅逐し去るといふやうな不見識には陥りたくない。

だが住む人の風俗習慣と共に、住居を規制する大きな要素に、風土氣候といふものがある。南北とどこかまはすた

だ疊さへ敷けば、日本人が住むための家ができると、安直には考へたくはない。ただ日本人と疊の上の生活といふものを、あくまで忘れないやうにして、南や北に建てられる日本人の家を慎重に考へるやうにしたいといふのである。

日本内地で、田舎や大都市の家屋密集地でない所で、木造家屋が許されるやうな場合には、疊といふものはたしかにいいものである。かうした場合には、疊のよい傳統といふものは、どこまでも活かして發展さすべきものだと思ふ。だが所が内地ではなく、暑熱きびしい南方や寒冷烈しい大陸で、そこには木造日本家屋の傳統といふやうなものが何もなかつた土地であるとき、邦人の居住家屋といへども、疊の土の生活といふものは、あらためて検討さるべきものであることはいふまでもない。

南方の事情は、まだ實見の機に恵まれないので詳しくは知らないが、避暑を目的とした開放的な日本家屋と同じやうな木造形式で家が建てられる場合には、疊を部屋に敷くにしても、さほど不調和なものとはならぬであらう。だが滿洲や北支といふやうな冬の酷寒が零下何十度にも達し、家の構造も木でなく、主として煉瓦建の場合には、疊さへ敷けばそれで邦人居住家屋となり、それでいいとあつさりとはすまされないのであらう。

數年前熱河遺蹟の美を探るべく承德を訪れた。そこで二

三日滞在した承德ホテルは、その時の滿洲三十日の旅で泊つた各地の宿のうちでも、なかなか落ちついた氣持のいいものだつた。それは滿洲でいちばんよい季節、初秋九月であり、また承德といふ古都だつたせもあるであらうが、その宿の建物の具合が何か由緒のありさうな支那式のちよつとした邸宅を、そのままに宿とした趣きのあるものだつたからであらう。かなり広い中庭をかこんだ平家建の房室に客室がとられてあつたが、どの部屋にも疊が敷いてあつた。煉瓦の壁や、それに開けられた小さな窓や、またその天井は支那家屋そのまま、ただ疊だけを無難作に、土間から一段高くした部屋の床に敷きつめたもので、床も棚もなく、日本人が泊るのだから疊敷きにしたのだといふ、何のたくらみもない自然らしさに、好感がもてた。

雲崗の石佛を見學の折、大同で泊つたのも日本宿で、支那家屋の房室にただ疊を敷いた客室だつたが、承德の宿ほどに落ちついたものではなかつた。季節が盛夏の最中であり、それに大同の街が何かごみごみとかさついたものであつたからかもしれない。北京滞在中同地在住の建築家から一夕の招宴に通された席は、借行社の一室だつたと思ふが、やはり支那家屋で、その大きな部屋には一面に疊が敷きつめられ、床や棚も整然とつけられてゐた。建具などは支那風のこまかな格子模様をもつてこてしたものだつたやうに憶えてゐる。部屋の氣分は夜だつたせるか、なかなかよかつた。



その頃はよく満洲に出かけたが、新京での定宿は大同大  
樓に面する鐵筋コンクリート造三階建の白壁のま新しいホ  
テルで、その客室にはみな疊が敷いてあり床棚もちやんと  
つけられ、建具も天井もすべて型通りの日本式だった。だ  
が外壁の窓はさう大きくない洋式であるから、外からみれ  
ば純然たる洋風で中の客室だけはすつかり和風であつた。  
つまり鐵筋コンクリートの箱の中に、木造の和室を嵌めこ  
んだやうなもので、かうした形式の家が當時新京はじめ滿  
洲各地で數多くみられた。

煉瓦の外函の中に、木の和室を疊ごとそつくり容れると  
いふ手法は、一見なるほどと思へるが、よく考へれば  
あまりに御都合主義の觀がある。煉瓦の箱の中に入れたさ  
うした和室では、ただそこに疊があり床や棚があるといふ  
だけのことで、疊のよさも床棚の美しさも百パーセントに  
は決して味へるものではない。庭につらなる縁先が廣々と  
打ち開いた部屋でこそ、疊や床棚もいいのだが、縁がなか  
つたりまたあつても小さな窓しかもたぬ厚い煉瓦の壁が、  
縁先に重々しく立ち塞がるやうな部屋では、疊はいかにも  
退屈的にみえ、床や棚も暗がりとなつて、甚しく精彩を缺  
くであらう。疊や床棚のよい傳統も、煉瓦の箱の中では徒  
らに因襲の醜態をさらすだけである。

滿洲國の建築局では、邦人の「住」の問題をとり上げて  
それをあらゆる角度から慎重に検討し、その起居様式は疊  
の部屋をつくらず腰かけ式といふことに決したさうであ  
り、わたくしどもの住んでゐた家は、家主の住まひと棟つづ  
きの、ちよつと離れの一郭をなすやうな構へで、葦崎から  
飯澤へまつすぐ南へ通ずる街道に沿ひ、道側には黒板塀が  
建されてゐた。その家の間取りの様子がどんなだつたか、  
時折想ひ起してみても、あまりよくは記憶に残つてゐな  
い。何でも東向きの家で、冬の陽射しなどは殆ど入らぬや  
うな、やや暗い感じの家だつたことだけは頭に残つてゐ  
る。

この家の西側に、小さな高窓をたつたひとつもつ鱧の巢  
然とした細長くて暗い納戸風の部屋があり、そこに切られ  
た炬燵で、冬の夜雪をききながら、家族團樂した山國らし  
い生活も、少年の頃の忘れられない想ひ出のひとつであ  
る。この部屋の小さな窓は、子供が伸び上つてやつと外が  
みえる位の高さにあり、窓下に米櫃が置いてあつたので、  
よくその上にあがつては、一面の畑越しに雪に白い駒ヶ岳  
連山を、村に近い西山つづきに眺めて、子供心に遠い高い  
山だなーと飽かず立ちつくしたものだつた。その連山の向  
ふ側に天龍峽の勝があるのだと聞かされた。  
窓といへば、まづ少年の頃の駒ヶ岳を遠く眺めて親しん  
だこの小さな高窓が頭に浮ぶ。  
窓は建築の眼だとよくいはれる。口はさしあたり玄關か

る。資材の點からも至極結構なことであるし、何よりも滿  
洲らしい邦人居住の家屋が、疊を揚棄して新たに生まれる  
端緒が開けたわけで、當事者の達識と英斷とに敬意を表し  
たい。だが所は滿洲でも、中に住むのは日本人なのだか  
ら、「疊さへ敷けばいい」といふことが誤りであつたと同じ  
やうに、「疊さへ敷かなければいい」といふことも、また誤  
りであることに深く思ひを到して、これこそ滿洲で日本人  
の住む家だといへる理想的な住居形式が、在滿日本建築家  
の創意努力によつて立派に生まれることを希ひ、また期待  
もしてゐる。

## 窓

わたくしは、甲府の西三里のIといふ村で、小學校の五  
年のときまで暮した。このあたりの村々では、その頃煙草  
の栽培がさかんで、父がその隣町の專賣局に勤めてゐたか  
らである。この村に五ヶ年あまり住むまでは、これも煙草  
の産地だつた茨城縣下のIといふ町に住んでゐた。四季の  
折々に、また一日のうちでも天候の具合や時刻のちがひで

出入口といふことにもならうが、建築物を設計したり意匠  
したりするとき、その窓の形や大きさ、またその配列の具  
合などに對しては、建築家は並々ならぬ苦心をするもの  
だ。ただ無難作に窓を開けたのでは、壁面が徒らに雜然と  
したものになるだけで、建築物全體としての統一した美觀  
の昂揚にすこしも役立たぬばかりでなく、ぶちこはしにな  
つてしまふ。口ほどにものをいふ眼は、大きすぎてもいけ  
ず、また小さすぎてもいけない。離れすぎても間が抜ける  
し、またくつきすぎれば温容を缺くことともならう。顔  
で眼が大切であるやうに、窓は建築でその形を整へる上に  
重要な要素である。更に、窓は單に建築の形を整へるとい  
ふ造形上の要素の他に、採光や通風換氣といふやうな建築  
の實質的な問題から、住まふ上の快適さを左右する極めて  
肝要な要素でもある。また空襲といふやうな非常の條件を  
考慮に入れば、窓のもつ意味はいよいよ複雑且つ重要と  
なり、その合理的な解決は、益々むづかしくなつてくる  
であらう。

古今東西の建築を通觀するに、その土地々々により、ま  
たその時代の如何によつて、窓の形がいろいろとちがつて  
ゐるのに氣づく。いちばん普通にみかける窓の形は、正四  
邊形のものだが、同じ四角のものでも、豎と横との長さの  
寸法がちがふに従つて、横長や豎長となり、また正方形と  
もなつて、それぞれちがふ感じの窓となる。四角の窓でも  
歐米のものは豎長のものが多いのに反し、日本のものはど



ちらかといへば、横長のものが多い。かうした窓の形といふものの上にもみられる彼我の差は、形といふものに對する歐米人と日本人との間の差異から結果されたといふよりはむしろ日本と歐米といふ土地の自然や風土氣候などの諸條件にみる差から生まれたものであり、更に直接的には、建築物を構築するところの主な軸部構成材料の差からきたものであることが、建築技術の上から指摘できる。

## 二

ヨーロッパでは、古くから石や煉瓦で家を建てる手法に據つてきた。かうした材料で建てられる家は、比較的小さな石や煉瓦の断片をひとつひとつ根氣よく積み上げる構法によらねばならぬから、幅の廣い横長の形の窓を壁に大きく穿つといふことは技術上からは、不可能ではないにしても、構造上すくなくからぬ無理を伴ふことは否めない。すなはち石造や煉瓦造の家では、壁が上からくる荷重や、地震や風等の外力に抵抗するための支持體となるものであるから、その壁に大きな窓といふ穴をあけることは、構造の上でそれだけ建物の強さを弱めることとなる。だから石や煉瓦の家では、建物に充分の強さをもたせるためには、窓や出入口等のいはゆる開口部をあまり大きくしないことが、合理的な構法上の要領となり、従つて壁に窓を小さく、ポツリポツリと開けたやうなのが、いいといふことになる。わが國では、この善悪は別として、古くから家を木で

造るといふ方法が、その主な構造形式として發達してきた。この木造といふものは、その構造理論の根本が、石造や煉瓦造とちがひ、柱や桁で組み合はされた架構體が全體として、上からの荷重や横からの外力に對する抵抗支持體となり、壁の部分は強ひていへばその構造の上から、あつてもなくてもかまはないといふことになり、壁の部分にどんなに大きな窓を開け出入口をつけても、建物の強さにはさまで悪い影響をば與へないといふ有利な點があるので、窓なども必要に応じて、いくらでもこれを大きくしようと思へばできることになり、在來のわが國の住宅やその他の建物にみるやうに、横長の大きな窓が好んで使はれることとなつて、極端な例では壁中窓だらけといふやうな場合もありうる。

かうした構造上の觀察からはなれて、風土氣候といふ上からみても、ヨーロッパ各地では避暑的な建築よりはむしろ避暑的な建築の方が、概ねその土地の自然條件に適する。窓の小さな方が住の快適性を満足することともなる。これに反してわが國では、夏の高濕多濕に對して住の快適さを増す工夫が、家をつくる場合の主な目標となるべきであるから、よく避暑の目的を達するやうに、窓などつとめてこれを大きくした開放的な家がいいといふことになる。

横長の大きな窓といふよりは、壁中出入口とみえるやうな日本の家に常時住みなれてしまふと、造形といふものに

對する感覺の上からも、おのづから廣瀾の窓をもつ家が好ましくなり、西洋流の小さな壁長の窓をもつ家には、あまり好感がもてなくなる。窓が小さいと、それだけ採光面積が小さくなるわけで、部屋もとかく暗くなりがちであり、住まふ上の明るさや快よさが失はれるうらみがある。窓が思ひ切り大きく、明るい部屋をもつといふことが、わが國の住まひの大きな特徴のひとつである。

窓の小さな部屋をもつ家は、生活を暗くしまた不健康なものとするといふことが強く認識されて、歐米でも日本のやうに、窓を大きくして家全體を開放的にするといふ傾向が、ここ二十年來特にさかんになつてきた。前にも述べたやうに、石や煉瓦の家では、かうした要求もさう簡單には解決されないのだが、今日一般に廣く行はれるやうになつた鐵筋コンクリート造や鐵骨造では、木造建築と同じ構法がとられ、壁の部分にどんな大きな窓を開けても差支へない。だから歐米でも、近頃は窓の大きな家がどしどし造られるやうになつてきた。そして大きな窓からくる冬の寒さに對しては、暖房に機械的設備を整へて對處される。

「より多くの光線を、空気を」といふことが標語となつて、窓をつとめて大きくするのは、生活に潑刺とした明るさと健康とをとり戻さうといふ強い要求からのことで、この窓の形や大きさだけからも、古い建築と新しい建築とを區別することができるであらう。だが壁中窓だらけで一面の硝子障子でとり圍まれたやうな部屋での生活は、なるほ

ど明るいにはあがひなからうが、それが度を越せば落ちつきを缺くやや索然としたものとなるうらみがあらう。

## 三

日本の家の窓は、横長で大きい。だがさうした家の中の生活は、あくまで落ちついたものである。なぜか。豊富な太陽光線はふんだんに部屋に射込むが、日本紙といふ微妙な素材を通して、すつかり淨化され美化された後に、始めて部屋に導入されるからである。硝子を通つた光は生のままであるが、日本紙である障子紙を通して入る光は、美しく味つけられてゐる。日本の建築には、數々のすぐれた傳統があるが、紙貼障子といふやうなものも、さうしたい傳統のひとつで、いつまでも活かしたいものである。

硝子障子にしても、レースやカーテンの類をうまく引けば、部屋の落ちつきもえられようが、紙貼障子といふ日本獨特のいいものがあるのであるから、これを新しく活かして使ふことに、日本らしさを部屋の中に端的に漲らせたい。椅子卓子式の部屋といへば、人はすぐ洋風らしい硝子障子を建込んだ窓を聯想するらしいが、さうした部屋でも紙貼障子を自由自在に使ひこなして、日本の部屋らしい性格をうまく表すに越すことはない。

窓のしまりは三重にしたい。すなはち紙貼障子と硝子障子と板戸の三段構へである。硝子障子一重だけの窓をよく見かけますが、どの點からしても感心できない。和風住宅の



常法である雨戸をせむとも硝子障子の外に引くやうにした  
い。雨や風のため、また防寒や防盜の上からも雨戸は決し  
て忘れてはならぬ。燈火遮蔽も雨戸の大きな効用のひとつ  
である。この硝子と雨戸の二重のしまりでひとまづ充分で  
あるが、更に内側に紙貼障子を引けば氣分の上で萬全のも  
のとなる。座敷前の縁側を考へてみる。縁先には硝子障  
子が引かれ雨戸が建込まれる。そして縁と座敷の間には紙  
貼障子が引かれてゐる。それは板・硝子・紙の三重であり、  
硝子障子と紙貼障子との間に三尺から六尺の板縁がとられ  
てゐる點が、窓を三重の建込みとした場合とちがふだけの  
ことである。

窓の形も、四角のもの他にいろいろ變つた形のものがあるが、單純な四角なものが平凡ではあるが、それだけ見飽きるといふことがなくいい。木造建築では、窓にかぎらずすべての部分の形が四角となり直線形となるのが自然である。それは木材といふ材料の特性からくる當然の造形であつて、さうした木造建築の直線性になれたわれわれ日本人の造形感覺は、素材で單純で明快なものを好むやうになつたとも考へられる。だから華頭窓の形などはあまり日本的ではない。

爆風で硝子が粉微塵に壊れないやうにと、硝子に布や紙を縦や横やまた十文字に貼ることがすすめられる。居住の明朗と快的を増さうとすれば、窓はこれをつとめて大きくすることが望ましく、高温多濕の夏といふ住みにく

条件をもつわが國では、特にさうありたいのだが、空襲といふものを考へると、窓が大きいことは建築物を弱め、また被害をそれだけ大きくすることとなる。

平時だけを對象とすれば、窓はできるだけ大きくしたいし、戰時を考へると窓があまり大きいのは、考へものだし、いけないといふことになる。平時と戰時とで二つの全く相反した要求が、窓に對してなされるわけで、これをどう解決したらよいか、なかなか苦心を要するところだ。

理論的にいへば、窓は大きい方がいいといつても、大きくければ大きいほど、ただ過熱といふわけのものではなく、そこには或限度がある筈だから、或一定の容積なり面積の部屋に對しては、これだけの光線量はせむとも必要であり、またこれ以上の光線量は無駄なものだといふ限界が科學的に決定されれば、この必要にして且つ充分な光線量の導入が満足される程度に、窓の大きさを、その位置や形を決定すればよいといふことになる。そしてこれだけの窓開口部は、部屋としてせむとも保有しなければならぬものなのだから、空襲に對してはそれよりもすつとすつと窓が小さい方がよいとされても、それ以上に窓を小さくすることは、部屋としての平時の機能を著しく阻害することにならう。だから、それだけの窓面積は絶対なものとして、しかる後に空襲時に対する防空上の措置を考へるのが本筋であらう。

## 床・棚・書院

友人K氏の家の設計でわたくしは、和洋の住まひにみるそれぞれの長所なり傳統を、できるだけ活かしてとり入れようとして試みた。そしてそれはフランス人の切なる要請でもあつた。まづその廣間は二階まで天井を打ち抜いて、高く廣々とした感じのものとし、その一隅に階段を配し、その踊場や上り切つたところの廣場からは壁に沿つて總敷をめぐらし、廣間を上から見下ろせるやうにした。子供があればあぶなくていけないが、子供のいないK氏の家ではその心配はない。窓を壁に大きく開けて紙貼障子を大膽に建込み、外側に硝子障子を入れ、更に一部には雨戸を引くやうにした。明るくて廣々とした氣もちよい廣間は、まづこの家に入る者にゆつたりとした氣分を與へるに役立つてゐる。かなり大きな家でありながら、その玄關や廣間があまり小さなのは釣合がとれないものである。

この廣間に接して、かなり廣い腰かけ式の客間が引違戸で隔り、それに隣る食堂とは、カーテンで仕切つた。カー

テンを引けば、三四十人の客は樂に寛ろげるほどの大きな一室となる。このいはば洋風客間の東側の壁沿ひに床と棚とをとり、南側の幅九尺のヴェランダとの堺には、中段を紙貼とし、上段と下段とに硝子を入れた引違障子を建込んだ。床は板敷で、その上には夫人將來の上等な北京絨毯がところどころに敷かれるといふ、言葉の上では和洋の雜然とした混淆だけのやうにも思へようが、でき上つた部屋の様子は、自費ではないがなかなか趣きがある。天井は桐板、照明器具は和紙をうまく使つた日本風。

和風の住まひにみる數ある傳統のうちで、その床の間廻りは、蓋しその最たるものであらう。西洋の新しい住宅の中に、この日本の床や棚から啓示を受けたと思はれるやうな室隅の取扱手法のものを見かけるが、床や棚のよさといふものは、その造形の上から端的に西洋人の心に觸れるものがあるらしい。部屋の壁を何の風情もなく、ただ四角四面に圍つた洋風の部屋と、床・棚・書院をもつ和風の部屋とを較べると、その室空間の構成といふ上で、瓦と玉のちがひがある。洋式の部屋では、繪は縁縁に入れて壁にかけられるだけであるが、軸をかけたその前に香爐を置くなりまた花を掛けて眺める床の間こそ、生活に藝術を融合させる日本間独自の境地である。床のよさはまた棚や書院のよさでもある。

床や棚や書院をもつ部屋に靜かに正坐するとき、長い歴史をもつ祖先の血を脈々とそこに體認することができるや



うにさへ思ふ。わたくしが、床や棚や書院のもつ神秘的な美しさに始めて心打たれたのは、まだ大學の學生であつた頃、京都奈良地方の古建築見學旅行の際、京都二條離宮の各殿舎の上段の間にみる豪壯華麗な床や棚や書院を見、また桂離宮や修學院離宮のお建物の要所に配された瀟洒としたそれらを拜觀したときだつた。それまでも床や棚をもつ家に住んで居るのだが、さうした市井の貸家などでは、それを建てた棟梁大工たちは、床や棚のもつほんとの意味を解せず、ただ因襲的な常法として漫然と床をつけ棚を配したにすぎなかつたらうから、さうした家に永く住んでも、それに深く心惹かれるといふこともなかつたのであらう。床や棚といふやうな美しい傑れた傳統でも、ただそれをひとつの定型として、形式の上から再現するだけでは、人の心を強く打つものとはなりえない。床や棚の意匠に血を通はせるにも、作者の意匠に活き活きとした創意と潑刺とした精氣がなければならぬのはいふまでもない。

名ある茶室の床は、みな潑刺とした創意に溢れてゐる。それらの茶室の作者である當時の茶人たちは、どうすればこの定型化した床の間なり棚といふものに活を入れることができるかといふことについて、おそらく想像を越えた苦心をしたことであらう。

二  
床や棚の名作には、桃山時代から江戸初期の頃にかけて

地袋・連棚などがそれぞれ形式を整へるやうになつたものと考へられる。

書院も鎌倉時代の釋家から起つたもので、當時僧侶は知識を代表し、これを指導する地位にあり、書を讀むといふことはその生活で極めて重要な部分をなしてゐたのであらう。この書見のために、縁側に一間ほど張り出したござんまりとした場所が當てられた。一段高いその床板を机としその前面には兩開きの戸を引くか、または左右に引き込む舞良戸や紙貼障子を建込み、古くは「出し文机」と呼ばれた。書院に雨戸や舞良戸を建込むといふことは、少しをかしく思へるかもしれぬが、その頃の書院の様子を描いた繪巻物、例へば法然上人行狀繪圖中の聖覺が唯心鈔を製作する圖などをみると、その頃の縁は今日の瀟洒式のもので、書院の窓は直接外部に面してゐたから、雨戸や舞良戸のやうな雨を防ぐ建具が必要だつたわけである。今日の書院は縁側に一尺すこしあまり出張り、その縁側のはづれに硝子障子や雨戸が引かれるから、書院にはきやしやな紙貼障子が引かれるだけである。縁側が広いときは、出張つた書院すなはち附書院または出書院もとられるが、縁側の幅が狭いときは書院を出張らすと、縁側の通路が狭すぎて面白くないから、單に窓だけを書院風につけた平書院とされる。

書院を出書院とする場合には、縁の幅が當然問題となる。従來和風住宅の間取りの上の基準寸法は三尺單位であり、縁側や廊下の幅も柱の中心から柱の中心までを無雜作

のものが多し。床・棚・書院の制をもつ書院造や、茶道の興隆と共に發展した茶室建築が、この時代に最も整備發達したからであらう。世に日本の「三棚」として喧傳されるものに、桂離宮の新書院の桂棚・修學院離宮の中のお茶屋客殿の霞棚・醍醐三寶院の醍醐棚がある。これらのいづれも桃山から江戸初期にかけての頃の作である。

床や棚や書院は、いつ頃か行はれ出したものか。その起原は中世の釋家すなはち僧侶の住まひにあるとされ、床は一説では鎌倉時代の僧家に於ける佛禮拜のための施設から起つたものとされる。當時の僧家では壁に佛畫を掛け、その前に板を置き、三具足といつて燭臺・香爐・花瓶の三つをその上に並べて、佛を禮拜するところとした。畫の掛物や三具足の具合などは、古い繪巻物の「慕歸繪」などにもよく表されてゐる。三具足を載せたこの押板が、後には三方に壁をめぐらした龍のやうな入込壁の中に設けられるやうになり、それが次第に形式化されて今日みるやうな床の間の定型にまで洗煉され形式化されたものである。

床の間に隣つて棚がとられるのが普通であるが、この棚の起りも床の間と同じ頃と考へられ、鎌倉時代の釋家の住まひの内部を示した古い繪巻物の中に、一間ほどの龍を縁側に突出したり、またはその全部を三段ほどに分けて、そこを戸棚としたり、或はすこし高く棚板を上げてその上にいろいろの器物を載せるやうにした設備の圖がみられる。これが今日の棚の原型であるが、次第に工夫されて天袋・

に三尺とするのが普通であるが、この寸法は單に人の通行が可能であるといふ最少寸法であつて、縁側を部屋の一部として單なる通路以上に活用しようといふ場合には、すこしく狭すぎよう。半ばの寸法ではあるが、四尺五寸位にすれば、縁側も通路以上の快適な場所として役立つであらう。

三

桂離宮新書院の棚は、まことに稀代の傑作である。この棚は、その布置がすでに特異で、變化自在の妙をつくす棚や戸棚が一段高い三幅敷の上に、部屋の隅角に矩の手にとられ、手前に瀟洒な出書院がみられる。その棚の構成はかなり複雑であるが、しかも決してうるさいといふことはなく、各素材の位置や形がこれ以上には考へやうがないと思はれるほどに、全體として實に巧みな諧調の美に輝いてゐる。藝のこまかな日本的造形の極致ともいふべきものの眞髓が、そこによく表されてゐる。飾金具などは殆ど使つてなく、あくまで簡素な取扱でありながら、その強烈な匠意が驚くべき手際よさで處理されてゐる。桂離宮は、建築としてそのいづれの部分も珠玉のやうに玲朗たるものであるが、この棚ひとつからだけでも、桂離宮の美はあますところなく汲みとれよう。

桂棚のある部屋の後化粧の間には、桂棚とはまた全く別な取扱のみことな棚がある。それは化粧の間の純實用



に即した棚で、物入れ用の戸棚が数多くとられてあり、使用上の便といふことが、その隅々にまで浸透してゐる。しかも用即しながらその用に打ち克つ底の美的構成が鮮かに表出されてゐる。普通の棚には遊んでゐる空間が多いものである。それがまた棚のいい點でもあるのだが、面積をぎりぎりに切り詰めた住宅などでは遊んだ空間の多い床や棚を理通りにとるのは、床や棚がどんなによい傳統であらうとも、考へものであり、また時には許されぬことでもあらう。かうした場合には床と棚との代りに、棚と押入をとることが實質的であるだけ好ましくなる。そしてそれにはどんな棚がよいか。こんなときに桂離宮の化粧の間の棚を想ひ起すのは、わたくしだけではないであらう。

修學院離宮「中のお茶屋」客殿の棚では、その變化ある壁の構成が特に美しく、また醍醐三寶院の棚は、いはば桃山趣味ともいふべきポツテリとした華麗なものである。これらの三つの棚を、誰がいつ頃日本の三棚と呼び出したのかわからないが、日本の三橋と同じく、もつといひ三棚なり三橋の選擇が或はできるかもしれない。だが棚の方では桂棚、橋の方では錦帯橋、これだけは誰の選擇にも見奪されるといふことはあるまい。

床を構成する部材は、床柱・床樑・床板(床疊)・落掛・天井板及び三方の壁であるが、これらいつれの部材も、あまりに凝りすぎたものはいけぬ。すべて建築の造形にあつては、匠意はあくまで炬火の如くに旺んでなければならぬが、それが「凝る」といふ形で表出されることは、決していいことではない。ひからびた匠意の持主である市井の工匠たちが、これみよがしの變に凝つた趣味から、床の柱や樑または落掛などに、妙にヒネくれた材料を使つたりしたものがよくあるが、そんなものはすぐ見飽きがしていいない。

敷寄屋趣味が度を越すと、とかくさうした骨董趣味のものとなりがちであるが、ほとんどの敷寄屋趣味とはそんなものではない。正しい敷寄屋では創意はどこまでも重んぜられるが、好奇は邪道として蔑まれる。名ある茶室の床柱に曲りくねつた自然木が使つてあるからといつて、それに似よつたものを普通の住まひの座敷の床柱に使つても、その通りの見栄えがするとは限らない。床の間は單に床の間だけとしてあるのではなく、部屋の一部としてあることを知れば、部屋に調和するやうな床柱・床樑・落掛などがいのだといふことが判らう。

棚を構成する素材は、天袋・地袋・違棚及び棚板等であるが、棚の種類を丹念に調べ上げた圖解をみると、百種に近い數多くの變型が示され、それにいちいち特殊の名稱がつけられてゐる。總じて複雑なものよりも單純な形式のものがよい。天袋と地袋とを上下にとり、その中間に違棚を二つも三つもとつたやうなのは、愈張りすぎた感で、せせこましくいやなものである。違棚の端には、筆返しをつけるのが普通だが、その異様な曲線は、部屋の他の部分

## 屋根

すべて直線で處理される和風の室内構成からみて、すこし破調の感がないではない。あまり神經質の潔癖として、笑はれるかもしれないが、對手が藝のこまかな和風住宅の室内で、また特に微妙な床や棚のことであるから、氣になるままにちよつと觸れたまでのことである。

東京や大阪やその他のわが國大小の都市では、その街路建築の最大多數は、二三階程度の規模の小さな商店なり住居で占められる。街路に立つて、さうした街路建築の正面を眺めるとき、その意匠上のあまりの亂雑さに呆然とするのは、建築家のわたくしだけではなからう。震災後のバラック建築そのままの東京で、このことは特に甚しいがこの東京の悪い例が地方の都市の街路でまねられてゐたりするのを見ると、教はれない氣がする。

東京の街に立つ。家そのものはその場間に合はせのひどいバラック建てであるにも拘らず、通りに面する正面だけは、立派に見せようといふのであらうか、四角四面のぶざ

まな「お面」をつけたやうな情好をしてゐる。屋根には勾配屋根と陸屋根とがあるが、さうした四角四面のお面を前からだけみると、屋根は平らのやうにもみえるが、すこし横から見上げると、案に相異してそのお面のうしろには、何と貧弱な勾配屋根が額をのぞかしてゐるわびしさである。みすばらしい家を立派な家に見せかけようとたくらまれたこの四角四面のお面をみると腹が立つ。あるべき屋根はあるがままに、どこからでもみえるやうにしたらしいのだ。四角四面のお面がポロポロくしのためならまだいいが、薄つぺらな四角四面のお面をかぶらせることによつて、洋風建築らしい表現を與へようとの考へからだつたら、立つた腹はをさまらなくなる。だが實際には、ポロポロくしよりはこの洋風偽裝の方がより大きな動機ではないかと、わたくしはひそかに恐れ、且つ情けなく思ふ。

家が木造であれば、その屋根は雨水に對する慮慮から、當然勾配屋根となるべきである。鐵筋コンクリート造なら陸屋根がまた自然となる。屋根はそのまま屋根として外形に表してこそ、屋根らしくなり建築の意匠の上からも正しいのであつて、四角四面のお面の壁を立て上げて、それをかくしてみえなくするのは、建築意匠の正道ではない。日本の街は日本らしくあるのがよいのであつて、薄い壁だけの並列で、西洋まがひの貧弱な街路正面を形成しようかといふのは、そのお面の薄さの如くに薄つぺらな考へである。



屋根は家を雨雪の難から護る大切なものであるが、家の形といふ上からも屋根は重要な要素である。この屋根の勾配は、その土地の雨雪の量を葺上げる材料の如何によつてそれぞれがふ。雨雪の量が増すに従つて、その傾斜が大きくなるのはいふまでもなく、わが國の住宅その他の建築では、五寸勾配すなはち一尺につき五寸上るといふ二分の一勾配が普通である。今日一般に使はれる棧瓦葺では、これで充分雨雪の難を防ぐといふ屋根の目的が達せられる。だが葺瓦屋根となれば、雨仕舞は瓦ほどよくないから、もつと急な勾配となる。

日本の家と歐米の家との差はいろいろの點で指摘できるが、その屋根の差も大きなものがひのひとつである。わが國の建築では、屋根はその造形の上で特に大きな役目を果してゐる。古來わが國の神社や佛寺の建築に應用された屋根には、その形の上からもまたその材料の上からもいろいろとちがつた形式がみられるが、それぞれすぐれた日本の傳統を示してゐる。住宅の屋根としては、専ら切妻型と四注(寄棟)型との二つが行はれた。住まひも大きくなれば、入母屋型(四注屋根の上に切妻屋根を載せたやうな形)も一部には行はれたが、これは普通の住宅の屋根の形としてはすこし仰々しい嫌ひがある。

## 二

歐米に於ける住宅の屋根も、主として切妻と四注である

が、本来西洋建築ではその屋根の形は變化に乏しい。切妻屋根と四注屋根との他には、マンサード屋根や丸屋根がある位のものである。同じ切妻や四注の屋根でも、日本のものと歐米のものとは、その形式はたとへ同じでも、屋根として現實に建物の上に載せられると、日本の屋根は歐米の屋根と、全くちがふ形のものとして表される。その差は主として軒の出のあるなしから生まれるもので、冠りものに例をとれば、日本の家の屋根は菱笠で、歐米の家の屋根は宗匠頭巾かまたはトルコ帽のやうなものである。歐米の家の屋根は軒の出は殆どなく、壁から直ぐな屋根となり、僅かに軒蛇腹の類で屋根と壁とが直切られるにすぎない。

住宅の軒の出は、二三尺程度であるが、建物が大きくなればそれにつれて軒の出も増される。それは主として形の上で安定観を建物に與へようとの造形上の配慮からくる意匠的な要求からだが、奈良西の京の唐招提寺金堂の堂々とした本瓦葺の屋根は、古社寺の屋根のうちでも特に雄大莊重な外容をもち、その軒の出は實に十八尺あまりといふ思ひ切つたものである。

總じて日本建築の美しさは、その屋根によつて著しく昂揚されてゐる。堂々として見あそぶ佛寺の本瓦葺屋根・輕快でも莊重な神社の檜皮葺屋根・雅趣溢れた田園農家の葺瓦屋根・清越洒脫の本室や茶席の板葺屋根・剛壯のなかに一脈の優美さをもつ城の屋根、更に和風住宅の棧瓦葺屋根はその平凡な手法のうちにも温雅の落ちついた響きぬ

響を表してゐる。かうした日本建築の美しい屋根にみながら西洋建築に接すると、そこには屋根の美しさといふものが、多くの場合に全く缺けてゐるので、一種の物足りなさが感ぜられる。しかし日本建築の屋根にみる美的表現といふものも、さうした屋根をもつわが國の建築が木造であるといふ前提の上に成り立つものなのであつて、木造が石造となり、煉瓦造となり、更に鐵筋コンクリート造や鐵骨造といふやうに、建築の構造形式が變つてくると、在來の日本建築にみるやうな大要な勾配屋根もその合理性を失つて、むしろ平らな陸屋根とする方がより適切で合理的なものとなり、それだけまた従つて美しいといふことにもならう。また深い軒の出は、わが國の風土氣候の關係から是非とも必要であることは、すでに前にも述べた通りである。

今は戦時中で、一般住宅の新築は殆ど中絶した形であるが、戦争前もかんに建てられた住宅の中には、木造でありながら無理に陸屋根にしたやうなものも少なくなかつた。さうした設計がなされたのは、屋上を庭園にするとか、洗濯場や物干し場にするためとかいふひとかゝの理由からであつたにしても、それだけのことでは木造の家の屋根を平らにすることの合理性が強く裏づけられるものでは決してない。木造陸屋根といふものは、その雨仕舞といふ點で構造上大きな無理があり、新築當座はどうやら雨水漏洩の心配がないやうに施工できても、長い間には必らず故障が起きるものである。そして雨が漏るといふことほど、住む上に

始末にをへぬいやなものはない。屋上を庭園にするとかその他に活用しようといふのは、敷地が廣くない市街地の住宅として、たしかにいい計畫にはちがひないが、それを實現するために、舊態依然として木造に據るといふことは、建築家としての創意の貧困を示す以外の何ものでもありません。木造でない他の形式を構造の上で考へることが本筋であらう。

陸屋根にする場合でも、屋根を平らにする方が形の上でスマートでよいといふ考へから、陸屋根への執着がなされるのだつたら、それは全然意味のないことである。家の屋根が勾配であるかまた平であるかは、家の形として決して本質的に重要なことではなく、木造家屋である以上勾配屋根であることが、構造上から自然でもあり、また落ちついた外觀ともなる。

## 三

古い社寺の屋根には、その多くの部分に曲線がみられる。いちばん多く眼につくのは、屋根面の「照り」と軒先の「反り」とである。屋根といはず、總じて建築の各部に曲線が用ひられ出したのは、欽明朝以後支那大陸との交渉がひらけてからのことである。かやうに建築に於ける曲線の應用は支那起原のもので、それ以前のわが國の建築はすべて直線を主としたものであつたことは、古い型を今に傳へる伊勢神宮の御正殿などによつてもよく窺へる。支那では



何時頃から屋根に曲線を使ひ始めたかといふに、おほよそ  
鎌倉時代から考へられてゐる。またその起原についても、  
いろいろの説が行はれ、天幕の形から起つたといふ説、竹  
の構造から起つたといふ説等もあるが、伊東博士の説は、  
「漢民族は屋根の形が直線であるよりも、曲線である方が  
美しいと考へたから曲線にしたのだと解釋することが、簡  
明で且つ合理的だと思ふ。軒の出の多い直線形の屋根を載  
せることは、恰も積木細工のやうであり、重苦しい感じも  
あり、あまり變哲がなさずと思つたのであらう。そこ  
で工夫を凝して軒を反らせ、流れを凹曲にし、これによつ  
て輕快の感を與へ、線の變化を作り、深い軒先が垂れ下つ  
てみへる眼の錯誤を正し、温情豊かにして趣味に富める一  
種の型を大成したのであらう」といふ漢人起原説である。

ここで注意されるのは、同じ屋根の曲線でも、支那建築  
のそれと日本建築のそれとは、その特質がかなりちがつ  
てゐる。日本建築の屋根の曲線は、支那のそれよりも節制  
があり、洗練された日本らしさをもつてをり、支那建築に  
みるやうな誇張は微塵もない。かうした屋根への曲線應用  
が、住宅の場合にはどういふ風に行はれてゐるか。關西の  
家では「起り」といつて、屋根の瓦面がすこし凸面状をな  
すものがあり、重い瓦で屋根面が壓し凹まされさうにみへ  
る重壓感を去つて、輕快の情を表そうとしたものだ。關東  
地方の住まひ家では、かうした手法は昔から殆ど行はれて  
ゐない。この點で關西の工匠の方が關東の工匠よりも、形

といふものに對して細かな感覺を、古くからもつてると  
も考へられる。かやうに屋根を凸面状にするには下地にな  
る屋根の樞の形や裏板の張方にも、直線状のものよりもよ  
けい手敷を要することはいふまでもない。たとへ手敷はか  
かつて、形よく見せる方が大切だと考へて、さうした手法  
が古くから關西の工匠たちの間に傳つたものと思はれる。  
「起り」すなはち凸面状となす代りに、逆に凹面状とする  
ことも、屋根瓦の重壓感を去る上のひとつの手段であるこ  
とは、古い社寺の屋根の「照り」でもよく判るが、住宅に  
これを應用したらどうかといふに、規模のあまり大きな  
家では、その効果がいふばかりか、むしろ考へすぎたとい  
つた感じがして、あまりいいものではない。「照り」をつ  
けるよりは、むしろあつさりといふと直線とする方が自然でい  
だらう。

屋根の形と共に、その葺上材料も慎重に考へられなけれ  
ばならぬが、銀灰色の普通の棧瓦はなかなか落ちついた色  
調をもつてゐて見飽きがしない。中國地方でよく見かける  
釉掛けの鳶色のピカピカ光つた瓦も温か味があつていい。  
陽光を受けたさうした瓦屋根が、光線の具合でまづ白に光  
り輝いてゐるのはなかなかさかんなものである。瓦の色も  
さうした鳶色程度なら派手なうちにも温か味ある落ちつき  
もあつて親めるが、フランス瓦などと銘打つて造られる洋  
瓦のうちには、その赤や緑の色合があまりに淺く鮮やかす  
ぎて、派手といふよりは淺薄で騒々しいものがよくあり、

洋間の屋根だけをさうした洋瓦で葺いた家もよくあるが、  
見いものでは決してない。和風の家の一角に、壁を塗り  
上げ屋根を赤や緑の洋瓦葺として、「洋間ここにあり」と呼  
ばはつたやうな家を、和洋折衷などといふのは、すさまじ  
い限りである。

## 燃えぬ家

一と口に住まひといつても、それが建てられる土地なり  
また中に住まふ人によつて、いろいろとちがつてくる。住  
居はこれを大きく分ければ、おおよそ二種類となる。すなは  
ち農山漁村の住居と都會地のそれとである。従来わが國の  
建築は、その建てられる場所と種類の如何を問はず、すべ  
て木造であつた。今日大都市の公共建築の類には、鐵筋コ  
ンクリート造や鐵骨造のものもすこしはあるが、それでも  
都市をうつめつくす建物全體の棟敷からすれば、晴天の星  
の如く寥々たるものである。住宅建築で鐵筋コンクリート  
や鐵骨のものは更に稀である。

この木造建築といふ點では、わが國の建築はまことに世

界に冠たる發達を遂げてゐる。わが國の建築の傳統といひ  
また住まひの傳統といふも、それはいひかへれば「木の傳  
統」ともされよう。日本建築の美的構成といひ、また美的  
表現といふも、それはとりも直さず木の美的構成であり、  
木の美的表現である。日本の建築では、宿命的とさへ思は  
れるほどに、木から木に徹底してきた。わが國の建築はな  
ぜそんなに、木造にだけ終始してきたのか。家を建てる材  
料としての木が手近かに豊富にあつたことが、何より大き  
な理由であつた。木材の不足が今日既にいはれもするが、  
それも昔よりは少くなつたといふだけのことだ。いざ木造  
船や木製飛行機といふときには、その需要量は即座に満た  
されるであらう。木を伐ること、伐つた木材を運ぶことで  
需要が満足されないにしても、それはわが國の木材に恵ま  
れてゐることとは、何の關係もないことである。ひと度木  
で家を造ることに慣れてしまふと、木といふ材料が手近か  
に入手できる限り、他の材料例へば石や煉瓦の建築に移行  
するといふことはちよつと考へられない。木はその工作が  
至極簡單であり、施工も容易である。従つてその構築に要  
する努力も資金も、他の材料例へば石・煉瓦・鐵筋コンク  
リート・鐵骨等による場合と較べて、遙かに尠少ですむと  
いふ利點がある。支那建築はもともと木造建築として發達  
したのだが、それは國內で木材が簡單に入手できた頃まで  
のことだ。山あれど樹なしといふことになれば、木に代つ  
て煉瓦や石等の材料が建築に使はれ始めた。ギリシヤ建築



も、その原型は木造であつたが、後石造として大成したのは、支那の場合と同じやうに木材が不足してきて石材に移したからである。

わが國では、幸か不幸か木材は太古から今日に至るまで足らぬといふことはなかつたから、終始木造建築に一貫して、家といへばそれは木の家に他ならなかつた。戦ふための城ですら石垣の上の木造建築であつたのだ。古來三千年の長きに亘つて、われわれ日本人の生活を容れる器が木の家であつたといふことは、日本人の性格なり感情に大きな感化を與へ、日本文化のあらゆる特質は、この木の家の中の住まひでその根基が培養されたといふ考へられよう。國民の性格なり性情がその國の建築の様式に大きな影響を與へるといはれもするが、日本の國民性と木の家とを併せ考へると、國民の性格なり性情そのものの根本を形作る素因のひとつに「住」すなはち「家」があるとも思はれる。それは實證するわけにはいかぬが、もしわれわれの住まふ家が古い昔から煉瓦や石でつくられてきたとしたら、われわれ日本人の性格なり性情といふものも、今みるものとはかなりちがつたものとなつて現れてゐるだらうと思はれる。木はあつさりとして軽く、石や煉瓦はどつしりと重い。木の家に三千年來住みなれてきたわれわれ日本人の性情が、石や煉瓦の家に住みなれてきた他の國民のそれとちがふのはいふまでもあるまい。

しはあるが、都市區域の大部分は殆ど木造家屋の集團で填められ、宛然薪を積み上げて、その燃え去るを待つてゐる觀すらある。そしてこれらの密集家屋の多くは、店舗または居住用の建物であつて、すべては「住まひ」なのである。その規模はさう大きくはない。間口二三間高さ二階程度の小さな家が、思ひ思ひに俗悪な意匠をこらし軒を連ねて難然と建ち並ぶさうした街路建築に對するときは、わたくしはいつも慄然とする。そこには何の秩序も組織もなく、まして建築個々の美も、また集團的な都市美など微塵も見出されない。かうした建築の集團で、日本の代表的な大都市が填められてゐることの國家としての耻を、お互にわれわれみづづからの責任として認めなければならぬといふことは、嘆かばしい限りである。

都市を燃えなくするといふことは、現代の都市がもつべき第一の要件であり、現代都市に課せられた至上命令でもある。この要件の充足なくしては、都市は都市たるの第一の資格を缺くことになる。灰になるのを待つ木造家屋の集團で都市を填めたわが國の過誤は、抑々何に起因するか。これにはいろいろの理由がある。(イ)木造建築の惰性。わが國の建築は古來木造に一貫してきたから、家といへば木とすぐ考へてしまひ勝ちである。(ロ)木造建築の安價性。木造家屋は他の石・煉瓦・鐵筋コンクリート等に比し、その構築費は著しく低廉である。このことは直接民度と關係する。(ハ)木造に代るべき適當な構造方式の缺如。耐火構

## 二

木で家を造るといふことを考へてみる。  
木で家を造つてもよい場合と、いけない場合とがある。農山漁村の家や、都會地でも家屋のあまり密集してゐない地區や、郊外地の所謂住宅地などでは、木の家も許されようが、都市内家屋稠密の街區にあつては、木造家屋は斷乎として排されなければならぬ。「住まひの傳統」としてここに記してきたやうな日本住宅のよさも、木造家屋が許されるやうな場合に限つて、始めて精彩を放つのであつて、木造が許されぬやうな場合には、さうした傳統も更に一段と嚴格に檢討され直さなければならぬ。

わが國大小都市の現状はどうか。木造といふ安價な惡酒に酔ひしれてゐた醜い夢が、今B二十九の爆音で無慘にも破られつつある現状をとくと正視すべきである。木の味はひは三千年の傳統を傳へて、香高い和風住宅をそこに大成させてゐるが、都市をとどころかまはささうした木造建築で填めつくしてしまつた結果はどうか。敵のたつた「ヒト機」の投下する少量の焼夷彈によつてすら、數百軒數千軒の家が灰とされつつあるこの現實に直面して、今日までわれわれがただ安易につくといふ間に合せ主義から犯してきた大きな過誤を、卒直に認めそして深く反省すべき秋である。今日東京や大阪を始め國內大小都市の建築をみるに、その都心近くには鐵筋コンクリート造等の不燃建築物もすこ

造としては石造や煉瓦もあるが、これはわが國の地震を考へるとき問題にならぬ。鐵筋コンクリート造は耐震耐火構造として理想に近いが、理論上からはともかく、實際の上から市井の小規模の街路建築にまで遍くこれを應用することとは、民度の點で障礙がある。(二)法的強制力の微力。その好例は大震災以後の東京にみられ、法規の上では甲種乙種の兩防火地區が指定され、そこに建てられる建築はすべて耐火または準耐火構造でなければならぬのだが、實際は今見るやうに寒心すべき實狀である。

そしてその根本に、國家社會全體の都市なり建築といふものに對する認識の不足が強く指摘できる。すなはち建築は非生産的なものであるから、當座の間に合ふものでありさへすればそれでいいといふやうなまちがひが考へてある。建築こそ生産の基をなすものであるといふことを強調し、國家社會がこの認識にはつきりめざめることを希つて止まない。

## 三

都市を燃えなくするために、家を燃えなくするにはどうすればよいか。不燃都市の造成には、その大本の計畫として國土計畫・地方計畫及び都市計畫のことがあることはいふまでもなく、これらの諸計畫が萬全になされた次の段階として、都市の建築そのものを個々に不燃化するための建築技術が當面の課題となる。



燃えない家と燃える家との中間に、燃えにくい家といふものがある。すなはち、その大きな効力が認められてその實施が漏く勸奨されつつある「簡易防火改修」の方法である。これは本来燃えやすい木造家屋を、壁・出入口・屋根等の建物外周部の火仕舞強化によつて、その燃焼速度をできるだけ遅らそうといふのが目標であつて、いはば緩燃焼構造ともいふべきもので、燃焼に時を稼いで防火や消火の効果をより大きくしようといふのである。だがかうした家屋も、木造である以上結局は燃えてしまふのであつてただ燃えるのに普通の木造家屋よりも時間がよけいかかるといふだけのことである。その方法の要領は建物の外部に木の素肌を露出しないやうにするにある。

文字通り燃えない家は、どうして造られるか。鉄筋コンクリートがよいといふのが定説であり、この構法が耐震耐火のものとして最上の形式であることは、理論の上からもまた實際の上からも、すでに立派に實證されて一般にもよく識られてゐる事實である。これほど理想的な鉄筋コンクリート造も、住宅やその他の私的建築には、都市の家屋密集地区ですら、殆どこれを見ることができぬといふのが今日の現状である。これには諸種の原因もあるが、その最も大きな理由は、一般木造建築に較べてその構築に要する經費がかなり高價であるといふ點にある。すなはち一般民衆といふ上からみて、わが國都市の家屋密集地区の建物をすべて鉄筋コンクリート造とするといふことは、理想にはち

がひないがその實現性は甚だ乏しいといはねばならぬ。その施工の方法もやや複雑であり、また現場作業に制約されるその工法から、多量生産といふことも不可能に近く、自然經費高となつて、そのよいことはよく判つてゐながら、望通りに決して普及されぬといふ事情にある。

次のやうな各種要件を満足する構法はないものか。(イ)耐震的であると同時に完全な不燃性をもつもの。(ロ)多量生産方式の可能性から構築費が比較的低廉なもの。(ハ)解體移動が可能であり、増築・改築・模様替工事等も自由なもの。

ここに「鐵骨乾式構法」が考へられる。これは最少限度の鐵骨で骨組を造り、壁や屋根は勿論のこと、天井や床もすべて不燃性の人造板の如き材料で被覆し、窓出入口等の建物開口部も壁に準じて不燃板で遮蔽する形式の構法である。今日この構法が單純安易な従つて不完全な技法で應用されてゐるものに、工場や倉庫等の建築がある。

この「鐵骨乾式構法」を、都市の家屋密集地区の街路建築等に應用することの具現性を可能ならしめるためには、それが低廉な資金、すなはち木造と較べてあまり大きな差のない程度の經費によつて建設されるといふことが、まづ第一に解決されなければならぬ。このためには、建築物の規模並にその平面・斷面・立面及び設備等の諸計畫に規格を設けることによつて、各部分の多量生産を可能ならしめ

るやうにする。乾式構法は軸部材・被覆材及び充填材とから成り、軸部(骨組)構築によつて耐震性その他の構造上の抵抗力がえられ、被覆材と充填材とをよく吟味工夫すれば、壁・屋根・開口部・天井・床等をして、耐火・耐水・耐濕・遮音・遮熱等の効果を、充分よく發揮させることができる。

不燃構法として鉄筋コンクリート造を重構法とすれば、この「鐵骨乾式構法」は輕構法ともされよう。乾式構法の軸部を木材とすれば、緩燃構法に置き換へられることはいふまでもない。すなはち家屋の構法は、火に對する點から次のやうに分たれよう。(イ)可燃のもの。普通の和風住宅等にもみる木造。(ロ)緩燃のもの。木骨で木の素肌を露さぬもの。(ハ)不燃のもの。この中に輕い「鐵骨乾式構法」と重い「鐵筋コンクリート造」とがある。都市の家屋密集地区の建物を不燃化す上に、この「鐵骨乾式構法」は、それを解決するための重要な鍵であると信ずる。

この新しい「鐵骨乾式構法」によつて、相當程度まで規格化された市街建築を設計する場合に、日本の住まひがもつていふ傳統を、單なる形の上からではなく、その精神の上で充分よく活かすやうにしなければならぬ。たとへば三千年の歴史をもつ木はすこしも使はぬにしても、それは一見して日本の街であり、日本の家でありまた日本の部屋であることがすぐ感得できるやうなものでなければならぬ。ここにわたたくしが提案するこの燃えぬ家は、その軸部材

著者略歴

明治三十二年生。鳥取縣出身。東大工學部建築科卒業。工學博士。現在東大教授。專攻は建築學、特に其造形意匠及歴史的方面。建築學會、日本工作文藝聯盟理事、日本山岳聯盟理事長。主なる著書「過去の構成」相模書房、「日本の建築」國際觀光局。





ウエルズと世界主義	鎌倉文藝	海邊の墓地	ぎりしあの小説	菅原道真	萬葉集より	北原白秋	明恵上人	原子爆弾について	續山莊記	明治回顧	クレマソン	義理の魂	農心の理法	愛國心について	始皇帝其他	寸歩抄	日露戦争抄	者行代	淡窓へ	
土居光知	吳文炳	河盛好藏	吳茂一	上小剣	佐々木信綱	三好達治	穎原退藏	藤岡由夫	野上彌生子	大類伸	大佛次郎	守隨憲治	寺尾博	田中美知太郎	加藤繁	小宮豊隆	野上豊一郎	長壽吉		
續血と液	夢ケ原夜話	關ヶ原夜話	染色體を見る人の話	福澤諭吉傳	文字と國民	かた文化の発展	日本の禮儀	小説(題未定)	瓜喰のめ	天狗の話	小説(題未定)	小説(題未定)	小説(題未定)	小説(題未定)	追題	追題	追題	追題	追題	
古畑種基	藤岡由夫	藤森成吉	尾崎士郎	大町文衛	宇野浩二	山本有三	木村素衛	岸田日出刀	恒藤恭	伊藤永之介	高木市之助	高見順	武田麟太郎	坪田讓治	和田清	吉田洋一	湯川秀樹	向坂逸郎	正宗白鳥	太宰治
演劇の藝術	古典の遺	小説(題未定)	小説(題未定)	女性新訓	浮世繪全盛時代	巴斯カルの觀た人間	文學の意味	小説(題未定)	山崎と	抒情詩抄	島の地理物語	我があづま歌	形態と機能	便利主義と能率主義	古瓦の歴史	日本史	研究の自由	題未定	王昌齡春怨詩釋	
太宰府	本郷	井伏鱒二	林達夫	緒方富雄	高橋誠一郎	後藤未雄	中野好夫	川端康成	室生犀星	西條八十	辻村太郎	尾崎喜八	永野爲武	宮城晋五郎	梅原末治	佐野學	瀧川幸辰	駒井卓	吉川幸次郎	

3822

23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
若き女性に告ぐ	若き學徒に告ぐ	山莊記	長安波古	若菜頌	茶の美學	獨創について	模糊集	赤門懷古	萬葉人の生活	社會と思想	萬葉時代の	科學の芽生え	櫻田門外	散り散らず	日月明し	四季の氣象	芭蕉と紀行文	すまひの傳統	寒さと人間	雨ニモマケズ	郡司成忠大尉	血液	霜柱と凍上
富塚清	富塚清	野上彌生子	石田幹之助	柄内吉彦	谷川徹三	緒方富雄	松枝茂夫	入澤達吉	阿部次郎	阿部次郎	阿部次郎	中谷宇吉郎	田中英光	舟橋聖一	龜井勝一郎	荒川秀俊	小宮豊隆	岸田日出刀	柳壯一	谷川徹三	高木卓	古畑種基	中谷宇吉郎

昭和廿年六月十日初刷昭和廿年六月十五日初刷發行昭和廿年十二月廿日再版發行  
 三萬部  
 書名すまひの傳統  
 著者岸田日出刀  
 發行者鐵村大二東京都神田區駿河臺二ノ五  
 印刷者羽生通俊東京都京橋區湊町三ノ一二  
 印刷所株式會社大倉印刷所東京都京橋區湊町三ノ一二  
 發行所株式會社生活社東京都神田區駿河臺二ノ五電話神田二二八三振替東京四三三〇一  
 配給元日本出版配給統制株式會社東京都神田區淡路町二ノ九

八十



973

372A



終

